

## 言語学のフィールドワーク

若狭 基道

ナイル・エチオピア地域での言語調査を生業としている者は残念乍ら極めて少ない。本学会に於いてすら、言語学の発表をする事自体が場違いの感、否めない。そこで今回この場をお借りして、普段余り語られる事の無い言語学のフィールドワークの実態（の一部）を白日の下に晒し、何はともあれ言語調査や言語学に興味を持たれる方が少しでも増えるきっかけを創ってみたいと惟う。固より以下は私の個人的な経験と意見にのみ基づいている点、予めお断りしなければならない。

言語調査は一般に語彙調査、単語の聞き取りから始まる。大切なのは、快適な環境で行う、と云う点であろうか。例えば、炎天下を駈けずり廻るよりは涼しい場所に座って行った方が、能率的で粘りの多い基礎語彙調査が期待出来る。この点は強調しておきたい。扱、実際の作業であるが便利で工夫された調査票も幾つか公開されており、基本的にはその順に訊いていけば良い。然し、この調査票を本当に使いこなすのは中々大変である。臨機応変な対応が求められるのである。例えば、調査票の項目に挙がっていないなくてもその地域で馴染み深い事物は採録していくべきである。私のフィールド（ウォライタ）の場合なら、「インジェラ」や「エンセテ」が抜け落ちているようでは失敗と言わざるを得ない。某調査票に在る「おかず」と云う概念を分って貰おうと躍起になるより当地の料理名とその作り方を訊いた方が余程生産的である。これまた同じく某調査票には「日本」と云う項目が在り、これを訊くのは実は非常に意味の在る事なのだが、肝腎の「エチオピア」や現地地名の採集を怠って仕舞うようでは、重要な言語事実を見落とす虞すら在る。要するに調査票は飽く迄も手懸りに過ぎず、語彙調査は文化・社会調査の入り口にも成り得る一大仕事である事を忘れてはならないのである。斯く言う私も最初は大慌てで語彙調査を済ませて仕舞った。これが後の私の研究の遅れや深みの無さに繋がっている気がしてならない。

ところで調査も進んだ或る日の事、私の当時のインフォーマントが日本語を「調査」したいと言って来た。休憩時間を利用する形でいい、調査項目は自分で考えて来る、との条件である。私に拒むべき理由も無いので承諾したが、自分がインフォーマントにされるのは頗る貴重な経験であった。彼等の音声・音韻認識、文字使用等、言語研究に直接役立つ資料も得られた。が、一番印象に残っているのは「単語」調査である。調査票作りは難しい仕事で、行き当たりばったりでは直ぐにネタ切れになる（実は重要な項目が幾つも抜け落ちているのに）。だからであろうか、彼は何日目かに茲で書くのは憚られる様な単語許りを書き付けたメモを片手に「勉強」を冀ったのであった。私は篤実なので何であれ知っている限りの変種を何度も発音し、彼に教えた。然し私は繊細に過ぎるのであろうか、廻りに私の発話を理解する者は誰も居ない筈なのに、精神的な負担は決して小さくはなかった。無論この手の言葉も言語学者は調査する事に成っているし、私もそうして来た。それが間違っているとは今でも惟わない。だがこの件ではインフォーマントには最大限の配慮を常に忘れては成らないと身に沁みて感じたのである。

語彙調査が終ると文法調査が控えている。余り知られていないかも知れないが、文法用の調査票も存在し、語彙調査票以上に使いこなすのが難しい。生真面目に調査票の順序に従っていると能率が悪かったり、自分で追加項目を作成しなければ成らない事も在ったりで、言語学の実力の見せ処である。とは言え、どんな構造なのか見当も付かない言語の場合も在ろうし、運にも左右される。又、インフォーマントに質問の意図を分って貰うのも一苦勞で、「良くない」と否定形を採りたいのに「悪い」と答えられては困るのだが、その文脈では肯定表現の方が当該言語では自然なのかも知れず、取敢えずは有難くノートに書き留めるしかない。或る時、私は「子供の頭」を何と言うか尋ねた。勿論、属格構造と云う

か所有表現を知りたかったのである。インフォーマントは暫く考え込んでこう答えた。「子供の頭も大人の頭もこの前教えた húp-yi-a (頭) だ。何だ、日本語では『子供の頭』に特別な単語でも在るのか？」

頭と言えば言語調査には頭の良い人は向かない。否、頭は良い方が有難いのだが、莫迦莫迦しく思える事も一つ一つ丁寧に確認する作業に耐えられなければ成らない、と考える。例えば動詞の受身形の作り方は、二つか三つの動詞に就いて調べれば、直ぐに判る事かも知れない。でも私は動詞を一つ一つ片っ端から調べ、例文も作って貰った。その結果、予想もしないような用法が受身形にある事が判り、結局論文の形で纏まった。又、純粋な女性名詞が極めて少ない事には割りと最近気付き、名詞類体系全体の解釈に大きな影響を与えたが、これも最初から複数形形成法を少数の例から勝手に一般化せず、丹念に調べていれば直ぐに気付いた筈の事であり、己が賢しらを猛省せずにはいられない。言語には随所に不規則な面が在り（しかも其処が面白い）、対策としては屢々風漬し調査のみが有効なのである。三年間で博士論文が仕上がらなかったからと言ってその学生が怠慢であるとは限らない、と声を大にして言いたい。

以上の調査を行っても未だ、重要な事項が抜け落ちて可能性がある。媒介言語を通した面接調査では訊き出し難い項目もあろう。そこで自然な発話、会話を資料とした調査が必要となる。一つはテキストの分析である。民話でも何でも、自由に喋って貰うのを録音し、分析するのである。その際、現地で文字化・分析するのが鉄則である。でも語った当人も後で聞き取れない箇所が在るし、言い間違いも少なくない。何十分にも亘るテキストをノートに書き写す作業は手が麻痺してくる。抑々、上手く語れる人と語れない人がおり、日本人の誰もが昔話を澁みなく語れる訳ではないのと同様である。この様に実に労の多い仕事であるが、他面、論文のテーマ・資料の宝庫であり、割愛する訳には行かない。

人々の実際の会話を観察するのも大切である。気に成った表現に就いてさりげなく多数の人に尋ねてみたりもする。この場合も必ずしも泥濘んだ道を這い廻る必要は無く、店でお茶を飲んでいるだけでもかなり貴重な事が分ったりもする（私の様な出不精も稀であろうが）。但し現地とは言え生粋のネイティブ許りとは限らないので、私は別途必ず裏を取るようになっている。調査とは別に毎日の様に私の語学力

をテストして下さる有難い方々も近所に居る。と言っても「髪の毛」「眉毛」「睫毛」と下がって行って最後に身体の中心部にある毛の名前を答えさせて正解なら（当然である）大爆笑、と云うものだが、毎日飽きもせずにこんな事を繰り返す輩には何でも遠慮せずに質問出来るというものである。因みに時折日本語で何と言うかと尋ねられるが、そんな時には尋ねた奴の名前を言ってやる事にしており、これで又もや哄笑の渦。

現地に赴く以上、市場で物珍しそうな子供達に取り囲まれたり、ヨーグルトだか牛乳だか判らない物を御馳走されて腹を壊したり、と云った経験にも事欠かず、言語研究にも多分役立ってはいるが、別に珍しい話でもないだろうし、紙幅の都合も在るので今回は割愛する。

以上、強調したいのは、言語調査は人との濃密な関わりでの在る洵に楽しい作業である、と云う点である。我々のフィールドワークはインフォーマント自身も何時の間にやら言葉の面白さに惹かれ、調査者と共に研究対象にのめりこんで行く、そうした快体験共有の場なのである。「昨晚ふと思出したがそういうえばこんな言葉（表現）も在る、お前の研究に役立たないか」杯と、朝、開口一番に教えて呉れたりもするのが何よりの証拠である。

近年実学重視の輿論が囂しい。でも、例えば医学は何故「役に立つ」のだろう。病気になるたら苦んで死ぬのが或る意味自然ではないか。でも、我々は自分や身近な者が病に苦しむのは耐えられない。これは人間の理窟を超えた感情であろう。そしてその人間の感情を重んじ、満たすからこそ医学は「役に立つ」のであろう。ならば私は言いたい。言葉の謎が少しずつ判って来る愉しさも人間の尊い感情である、と。この感情が不当に蔑ろにされる社会は健全ではない、と。

まあ、これは屁理窟である。然し、言語研究は楽しい。この愉しさが博く伝った社会はそうでない社会より遙かに豊かで幸せな社会に違いない。苟も言語研究に携わる以上、私も聊かなりともこの理想郷建設に貢献せねばなるまい。その礎となるのは、逆説的だが、世に阿たり妥協したりしない地道な研究のみではないかと惟う。だから、今度の調査でも私は「1番日の牛、2番日の牛、・・・」と倦む事無く訊いていこう。

（わかさ もとみち 東京大学大学院）